

Report 小学校の「外国語活動」開始まであと2年

京都の町家を会場に 「プロジェクト型外国語活動研修会」開催

「小学校学習指導要領」の告示により、平成23年度から「外国語活動」が新たに小学校のカリキュラムに組み込まれる。現在多くの学校では実施されていたものの、これから本格的に取り組む教師たちはどのようにして指導を行えばいいのか。それらの疑問を解決するために8月23日と24日の2日間、京都市上京区の「京まちや 平安宮」で、「町家で行う プロジェクト型外国語活動研修会」が開かれた。実際に講座に参加し、プログラムの活動を追った。

未知なる「外国語活動」に向け各地から小学校教諭が参加

初日は全国各地から17人の参加者が集まり、午後1時から研修がスタートした。主宰者である東京外国語大学外国語学部・高島英幸教授のあいさつあと、「京まちや 平安宮」の代表を務める山中恵美子さんから、今回の会場となった町家についての歴史、文化に関する説明を受けた。

その後、高島教授により「『プロジェクト型外国語活動』の展望と重要性」をテーマにした本格的な講義が始まった。まず、参加者全員による30秒以内の自己紹介の時間が持たれたが、

教師たちは英語で自己紹介しなければいけないのかと、やや緊張している様子。そこで教授から「日本語でいいですよ。コミュニケーションに対する積極的な態度が大切ですから」とフォローが入った。

英語専門ではない教師たちが どのような活動を計画するかがカギに

今回の参加者のほとんどは英語教育を専門としていない。現実に外国語（英語）活動は、まだ未だ未知の世界という教師たちが主体となっていく。そのとき、彼らがどのように授業を進めていくのか、またそのために今からできることは何なのか——。そこで教授は、小学校の外国語活動における「タスク（課題）」の重要性を説明した。現在、中学・高校で行われている英語授業では、事前に授業内容が決まっている「プログラム型」の活動が大半を占めており、そこでは辞書で単語の意味を調べて会話文として使って反復することや「文法指導」に続くコミュニケーションを図る活動というスタイルに終始しがちになり、その先にある「覚えた英単語を使って何をするか」といった目的達成の活動にまで充分展開していない、と教授は語る。

そこで、課題を中心に活動内容が構成され、結果として1つの目的を達成する「プロジェクト型」活動の説明がスライドを使って行われた。例えば「英語の絵本を作り

ループで発表する」といった課題を与えることで、どのようにその課題を解決するか児童が中心になって話し合い、より主体的で自由な授業へと発展するのがプロジェクト型活動の特徴と言える。それらは「総合的な学習」と考え方方が密接にからんでおり、課題解決のために必要な英語の知識をプログラム型の活動でしっかりと練習をしていく、というスタイルが、これからの外国語活動にとって効率的なものになる、と説明した。

さらに「どんなに英語力がある教師でも、英語授業力や学級経営力といった児童とのコミュニケーションをする力を兼ね備えていることが大切」といった理論も展開。「授業は無理にすべてを英語で行う必要はありません。子どもたちに与える言葉は、必要に応じて的確かつ正確な日本語、あるいは英語を使い分け、意味の伝達を第一に心がけることが大切」と教授はアドバイスする。それは小学校で行われる外国語活動の大前提として「言葉を最も効率的に習得できる環境を作る」ことが教師に求められるからだという。児童にまず必要なことは、より多くの単語数や文の数を覚えたかどうかではなく、外国語を使ったコミュニケーションへの意欲をかきたてることにあると言いつて、それが教師の果たすべき役割だと締めくくった。

休憩時間には山中さんのセレクトによる京菓子とお茶が供され、伝統の味を楽しみながら学校の情報交換などに花が咲く参加者たち。休憩終了後は、いよいよ実際にプロジェクト型授業の組み立てに取り組むことになった。

絵本を題材にプロジェクト型活動を計画

実践に先立ち、兵庫県西宮市立高木小学校の東野裕子教諭が英語の絵本 *Whose Nose and Toes?* (Puffin Books) を使った実際の活動の様子を紹介。その後、2~3人のグループに分かれた参加者たちに同絵本が配られ、それを軸にしてどのようにプロジェクト型活動を展開せばいいのかを話し合う時間が設けられた。

同絵本は、全体を通して、右ページに “Whose Nose and Toes?” というフレーズが繰り返し出てきて、左ページに答えの生き物が描かれている。話し合いでは、その特性を利用して子どもたちに絵本作りに挑戦させてみると、いうものや、紙にイラストを書いてクイズ形式で “Whose ~?” の文を使うゲームをするなど、さまざまなアイディアが出された。それらをまとめたものをグループごとに発表し、そこからさらに意見交換が進められた。

すでに英語活動を行っている私立校の教師からは、英語の絵本を用いた、実際の活動の様子が併せて紹介され、未体験の教師たちも興味深く聞き入っていた。高島教授からは、英語専門の教師や ALT が週2時間以上の授業を行っている私立と、担任が中心となって授業を行う公立では授業の内容や展開、スキル面での指導に異なる点が出るのは自然であるが、コミュニケーション力を育成するための素地の観点では同じ、とのコメントがあった。

その後、東野教諭が高学年向けの絵本 *I LIKE ME!* (Puffin Books) を使った自身の授業例を紹介し、2冊の本のいずれかをテーマに活動プロジェクトの指導計画をまとめてくるという宿題が出され、1日目は終了した。

2日間で得たものをもとに 実践レベルの活動案を作成

2日目は、前日の宿題である絵本を使った指導計画をグループに分かれて発表し合った。実際に指導計画を考えていくと、ターゲットとなる学年と教材のマッチング、いかに導入からその日の課題へスムーズに移行させるか、さらには ALT のサポートをどこで効果的に組み込むかなど、それまでにイメージしきれていた部分に気づく。多くの参加者はプロジェクトという初めての手法で構想してきた指導計画に対し、教授や同じグループの教諭から次々と感想や質問が飛び出して発表は盛り上がりを見せた。

発表の後、新たな学習指導要領に関し、参加者から教授への質問タイムとなった。教授は、小学校でなされるべき英語活動の内容の提案や確認、計画の重要性を説くとともに指導要領自体の解釈にも触れた。小学校での活動は英語によるコミュニケーションへの関心を育成す

るためのものであること、さらに中学へ向けての成果・評価をどう提示していくかなど、将来的な展望を見すえながら「普段は使うことのない英語の会話表現を、どのように “使わざるを得ない状況” へと導いていくかがポイント」と、他教科と同様に1つのまとまった単元として授業を構成していくなかで課題を設定することで、児童が主体となる授業作りを計画するよう提言した。

休憩ははさんで、昨日の宿題のまとめを各グループが披露した。グループの代表が発表し、参加者はそれを真剣な面持ちで聞いていく。限られた授業数でいかに教師が時間と内容をコントロールし、児童の「伝えたい」というパワーを活動に反映させるか、そのためにはどう工夫すればいいのか、ここでもさまざまな意見交換が繰り広げられた。

この後、東野教諭により、自身が今回の会場である町屋をテーマに「日本文化を伝える」という目的で取り組んだ英語活動や、外国の小学校との相互交流プロジェクトが紹介された。それらをふまえたうえで、実際に授業として使えるレベルの活動案を参加者たちが各自で作成、できあがった案をそれぞれが発表し、研修会が終わった。

研修会の最後に、高島教授が次のように総括した。「まず教師が考えなければいけないのは、子どもたちのために何ができるかということ。児童が小学校で体験的な活動を通して、考えたり、相談したりなどして、自然と授業に積極的に取り組ませることが重要」

外国語活動は英語という手段を通じて相手に何かを伝えることのできる喜びを実感し、世界へつながる可能性に満ちた一步を子どもたちが自ら踏み出すためのベースを作ることにある。そのためにできることは何なのか、このテーマがこれからすべての教師にとっての課題になることは必ずだ。「外国語活動」正式導入まであと2年、年末には再び同じ場所で、今度は、来年度から全校に配布される「英語ノート」の活用を中心に3回目の研修会が予定されている。



風情たっぷりの会場で高島教授の講義に聞き入る参加者たち。会場の「京まちや 平安宮」は、江戸時代から続く油店の老舗「山中油店」(京都市上京区)が所有する京町家を改修、文化サロンとして2008年にオープンさせた。

参加者のコメント

「個人的には、字幕なしで洋画を見られたらいいな、というように英語に興味を持って勉強したいと思っています。英語担当ではないのですが、今まで、自分が受けた英語教育や小学校で行われている ALT が与えるだけの英語活動に疑問を感じ、いわゆる “しゃべれない日本人” が、いかに力をつけるかということに興味があり、知り合いの教諭からこの研修会を紹介してもらいました。この研修を通じて、プロジェクト型の取り組みは子どもが話したい・伝えたいという気持ちを大切にした方法だと感じました。ただ与えられるのではなく、子どもたちが知りたいといった “動機” が自然に『What?』へと変化し、やがてその素地が中学・高校へつながるのではないかと思います」

(西宮市立甲子園浜小学校・矢倉恒房教諭)